

企画展「中居屋重兵衛」好評のうちに閉幕

横浜開港
資料館

西川武臣氏が記念講演

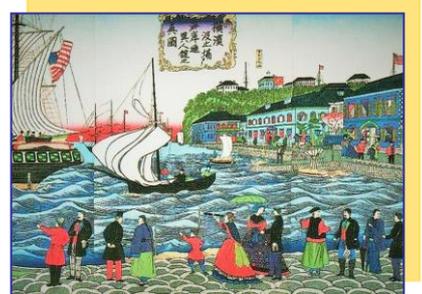


富岡製糸場の世界遺産登録を記念して孀恋郷土資料館で開催されていた企画展「中居屋重兵衛」が11月4日、好評のうちに幕を閉じた。同展は明治5年、富岡に機械製糸場が造られた、そのルーツをたどった時、中居屋重兵衛をはじめとする幾多の生糸商人たちの活躍を見過ごしにすることはできないと企画されたもの。藤本実也著「開港と生糸貿易」には、安政6年8月18日、中居屋より商人「ロレル」へ藩士の家族内職として紡がれていた最も上等な前橋堤糸28個が売られ、これが生糸を堤糸の形で売られた最初であることが記されている。以来、外商は日本の生糸のことを「前橋」と称するものと誤って、符丁として使っていたようである。このことから、生糸織物の本場フランスは、早くから最高級の生糸を産する上州に目をつけていたことは間違いないところであろう。

中居屋の商談開始
上田の商人伊東林之助日記から



さて、西川氏のこの日の講演は、信州上田の商人伊東林之助が上田藩の指示で城下町に集荷された生糸を中居屋を通じて外国商館に売り込むため、横浜に出向き、中居屋に滞在した時の日記を紐解きながらの話となった。中居屋が横浜港開港(安政6年6月2日)後、いつ横浜に進出し、いつ開店したか、また、外国商館との商売はいつから始まったのかなどを読み解いていった。



それによると、中居屋の店開きは、開港よりわずかに遅れ、林之助の日記によれば、自身の横浜到着が6月16日で、その翌々日の18日「中居屋にて大呂物(品物)切解大働」と、中居屋で荷物の梱包を解いたとある。そしてその翌日の19日の記述には中居屋が開店した旨が記されている。それによれば、開

店は早朝で、開店早々からイギリス人が生糸を見に来たとあり、この日は見本を見せただけであったが、商談があったことはまず間違いないとしている。

では、商談が成立したのはいつであったか。林之助の日記を見る限り、中居屋が生糸取引を活発に行うようになるのは、7月中旬以降である。7月21日以降の日記には、アヘン戦争のもとにもなったジャーディン・マゼソン商会やデント商会の買弁らが大量の生糸を中居屋から購入したと記されている。以来、中居屋と外国商館との取引量はかなりの数量に達し、ジャーディン・マゼソン商会の買弁との取引は一回で7千斤とも言われている。

残念ながら、林之助の日記をもってしても、横浜で最初に外商と生糸取引をした人物が誰であったかは不明だが、中居屋が開港直後の横浜に進出し、生糸貿易の礎を築いたことには間違いなく、その功績の偉大さを、参加者ともども改めて銘記しあつた。

---- ◎ ◎ ---- ◎ ◎ ---- ◎ ◎ ----

富士山、浅間山噴火の痕跡を観る



10月22日、孀恋郷土資料館友の会主催の村外研修が実施され、8月11日の浅間山噴火の痕跡を観る現地見学会に次いで、東大名誉教授の荒牧重雄先生とともに実際に現地を歩き、有意義な見学会となった。

22日はあいにくの雨となってしまったが、荒牧先生は、今年の3月まで山梨県富士山科学研究所の所



長の職にあり、かつては富士山と浅間山のハザードマップ検討委員会の委員長も務められ、話の内容は参加者にとって興味を引くものばかり。富士山における溶岩樹型

と浅間山麓のいわゆる溶岩樹型(火砕流によってできた樹型)の違いが現地の噴火の痕跡を観ることによってはっきりとわかったとの声も。この日は、まず富士山科学研究所で荒牧先生から、

富士山の火山活動について、今後、果たして噴火の可能性があるのかなどのお話があった後、続いて富士河口湖町の船津胎内樹型を見学。複数の大木が折り重なって、そこを溶岩が流れることによってつくられた地質学的にも貴重な造形物で、国の天然記念物にも指定されている。

一方、8月の浅間山噴火の痕跡を訪ねた現地見学会は、浅間溶岩樹型、鬼押出溶岩流の末端(孀恋上水道の水源)、東大の浅間火山観測所地内の地層、六里ヶ原から眺める溶岩舞台、プリンスランド内の巨大な岩塊の見学などを行った。



荒牧東大名誉教授と現地見学会